

キーワード：第三項理論 「縁意識」 「故郷」

広島大学大学院・院生 雷 民激

1 問題意識

筆者は、極めて、精神的に神経質な人間である。毎日、生と死の縁で生きる人間である。このような意識 ―縁意識― は、恐らく、十二年前も芽生えたが、確実に感じたのは五年前だった。筆者にとっては、この世の全ては、何も価値もない、好きなものは何か、なにをやっても幸せがあるのかという問題に、筆者は答えられない。

ただ、縁意識の人間である筆者にとっては、人間の思惟はただ、現実の世界のみならず、無意識の世界も同時に考える。したがって、縁意識の人間は周りから理解されない状態は逆に普遍である。その結果、縁意識の考えでは、身体は現実の世界に生きると言う、その現実に無力感が強くて目に見える世界は逆に生きる世界ではなくなり、無意識の世界こそが生きる道である。そして、このような縁意識の世界観によって、私の中の他者を追い詰めれば、追い詰めるほど、「他者」そのものが現れると考える。

この論文を、故郷論ではなく、存在論の哲学理論を取り入れた「新しい縁世界観」という文学教育の基礎理論として、作品研究理論を研究する。例として、「故郷」という近代小説を借りて、「私」の縁意識から生まれる縁の世界観を認識することで、自分の中の了解不能な他者を追い詰めることを研究する。本論文は、存在論の哲学論と認識論の文学理論の第三項理論と「縁」の世界観を用い、文学教育の基礎理論を研究するものである。その際、一つの例として、魯迅の「故郷」を取り上げる。

2 筆者自分自身の縁意識

筆者の場合、中国語の言語意識で、中国語の世界観認識を持っている。また、日本語の言語意識で、日本語の世界観認識も持っている。しかし、世界観認識は言語の環境によって変わってしまう。例えば、中国語を話す場合は、中国の世界観によって話す。日本語を話す場合は、日本の世界観によって話すということになる。

では、言語間の縁を超える縁は何の縁なのか？空

間と時間の縁、現実と虚妄の縁、それとも、生と死の縁？筆者の考えでは、人間はたくさんの縁を持っている。自分と自分の中の自分、あるいは、他者と了解不能な他者との間に、必ず縁が存在すると筆者は考える。しかし、その縁の考え、その縁の存在を気づくには、実に困難である。本章では、筆者自身自身の経験を通して、縁という感覚を理解しやすくするために、説明する。

わたしは十二年前、死というものを初めて知った。死亡と出会ったのは父親だった。わたしは、外で、父親が死神に連れられてあの世に行かれるのを見た。当時の小学生であるわたしは、悲しみという感覚がなかった。ただ、母親と周りの人々の涙を見てから、わたしも涙が出た。しかし、その後は、周りとの関係が微妙になってきた。父親が亡くなった後、周りの人、親戚にしても、友達にしても、わたしと母親を見る目が変わってきた。それが悲しみだった。

今から十二年前、わたしは父親の死を通して、人間というものを初めて知った。目の前で現れることしか信じないもの、変わりやすいものこそが人間である。けれど、その時のわたしは死亡というものは近いが、自分にとってはまだ遠いと思うと思ったが、その途端に、交通事故に遭った。初めて、わたしと死神がすれ違った。二年かけて回復した。多分、いつも病院に通うことが多すぎるため、わたしは、病院に対して、対抗的な意識が生まれてきた。病院に行ったら死ぬことを思い出した。その時のわたしは、いつ死が来るのかをずっと待っている思いがコツコツと出てくる。

しかし、五年前、わたしは徹底的に死亡というものを感じた。人間の死は大体このぐらいの種類がある。自殺の死亡、自然の死亡、事故の死亡、病気の死亡などの死亡は良く見られる死亡だか、精神の死亡という死亡はあまり見たことがない。精神の死亡というのは、外から見ると健康な人間だが、内面の精神世界も完全に崩れた。精神の死亡は慢性の死亡と行っても構わない、ドンドン、精神的意識が亡くなって、人間もなくなる。精神的な死亡の特徴は心臓、

内臓の中に、痛みとかが感じないけれど、つまり、物理的に病気がないけれど、精神的に神経質な人間は、いつも心臓の心率の変化を感じたり、肝臓、腎臓の痛み、問題があるかどうかは気になったりするなどの問題が見られると思う。したがって、精神的に神経質な人間は、いつか死を来るのかを待っている。人間世界の賑やかさ、面白さ、を一切感じられない。感じられるのは、自分の心臓はまだ動けるかどうか、それだけである。

四年前のわたしは、パニック障害という病気に遭われ、発病の時は、脈数が通常の二倍になり、頭の中で、血管が破れそう気がした。しかも、血圧も高く上がっていく。何回も救急車に運ばれたことがある。何をやっても、必ず、誰かを連れていて、トイレですら、誰かが隣で見ている。そのようなわたしは、大学を半年休んで、一人で北京の病院に行つて診察をしに行った。しかし、なんの結果も出なかった状態で、一日五つの薬を飲まされた。夜も眠れなく、何の希望もない、絶望しか見えないわたしは大学に戻って続けた。誰もいない。

発病の時のわたしが考えるのは明日の太陽がまた見えるかどうかである。その時、わたしの側は誰もいない、自分自身で自分を救うしかない。周りの人々は、あなたはまだ若い、色々挑戦しなさいと聞かされることが多い。しかし、自分は逆に神経質になって生きることしか考えたくない。薬を飲んでも、時々発病することもある。発病するたびに、自分は自分と戦う。体と精神が分離する状態で血液の流れが感じられる。まるで、熱波のように、わたしの鼻に流れる。わたしは、必死に、鼻から出ないように我慢している。

毎日薬に頼って、生きていく。もし、いつか、薬がないと、わたしはパニックになり亡くなるかもしれない。

筆者は、極めて、精神的に神経質な人間である。毎日、生と死の縁で生きる人間である。このような縁意識は、恐らく、筆者十二年前も芽生えたが、確実に感じるのは五年前だった。筆者にとっては、この世の全ては、何も価値もない、好きなものは何か、なにをやっても幸せがあるのかという問題に、筆者は答えられない。逆に言うと、幸せを感じる瞬間、不幸も来ると思って、したがって、幸せを感じないほうが良いと思う。と言うことは、筆者みたいな精神的に神経質な人間はきっと周りから理解できず、

孤独な存在、ずっと、何かを探しながら、自分の手で自分自身を慰めてきた。

3 縁意識と存在論 世界モデルと世界そのもの

田中（2013）は多層的意識の語り手と大森哲学を中心に「故郷」を分析した。田中（2013）は、近代小説の代表としての「舞姫」と「こころ」を取りあげ、魯迅の「故郷」にも、近代小説としての「真実の百面相」があると提示した。ここで述べられているのは、目に見えるのは真実とは限らないということである。

「真実の百面相」とは、この世では「虚偽の百面相」と等価、それぞれの「真実」は相手にとっては虚偽に外ならない、それを内部から見ると、皆それぞれ自身のまぎれもない「真実」なのです。（田中 p. 39）

筆者の考えでは、田中の第三項理論は大森の哲学論を前提にした理論である。第三項理論では、主体が捉えられない客体そのものという前提に「真実」の中に隠された「虚偽」が認識できる。そこで、永遠に了解可能な他者が存在する。

マルクス・ガブリエル（2019）自分の認識について次のように述べている。

「「つまり」一方で、自分自身のスクリーンに登場する何かについての意識しか私たちは得られないと言いつつ、もう一方では、そういったことがわかるのは、自分自身のスクリーンに現れない何かについての意識を私たちが得ているからだと前提するのは矛盾しています」（p. 97）

筆者は「真実の百面相」をわかりやすく理解するため、哲学の考えを用い、説明すると、人間は目に見えるものがしか認識できないため、見えるものは真実だと思わせる。実は、そうではない。簡単な例をあげて見ると、友達のSが新しい財布を買った。わたしは新しい財布を見て綺麗な財布だと思って、自分も買いたいと思った。つまり、わたしは財布の外の様子、飾り、カラーなどを見て買いたいと考えた。しかし、わたしは本当に財布が好きかどうかはわからない。すなわち、自分自身のスクリーンに現れない何かについての意識を私たちが得ているからだと前提するのは矛盾する。簡単に言うと、財布そ

のものかどうかはわからない。財布は何かを使って作られたのもわからないし、財布の中に何かを入っているのもわからない。けれども、この財布を見て、これが財布、この財布が好きという思いが生まれてくる。しかし、厳密に言うと、財布とは何かはわからない。

つまり、我々は物事を見るとき、意識がした瞬間、既にイメージを形成されたのである。こう考えると、世界の真実を見えにくくなる。と言うことは真実の中には百面相が存在すると考える。

筆者は田中の考えに基づいて次のように考える。「真実の世界」は目に見える世界にも関わらず、意識がある世界を指す。「虚偽の世界」は無意識の世界を指す。村上春樹の考えを借りると、意識がある世界は「地上の世界」、「無意識の世界」は「地下一階」である。では、「地下二階」は永遠に了解不能な世界、言語以前の世界、客体そのものの世界である。以上のように考えると、一項は「地上」、二項は「地下一階」、三項は「地下二階」という順番に並べることができる。

つまり、一項の「地上」は登場人物の世界、二項の「地下一階」は語り手の世界、三項の「地下二階」は「機能としての語り手」の世界である。村上春樹のインタビューの「みみずく」にしても、田中の「関係概念の作者」にしても、まとめると、近代小説の作家と文学作品研究者は文学研究理論を使って、地下二階（第三項領域）を発見するということを行っているのである。

では、「多層的意識」と意識の真偽はなぜ重要であるかという、田中が言う「多層的意識」は、所謂、地上と地下一階、二階の意識のことである。意識の真偽は「地下二階」で起きていること、つまり、永遠に了解不能な他者を出会うことで、この世界と異なる世界観が生まれてくる。しかし、問題なのは、永遠に了解不能な他者とどういうふうに出会えるのか、ということである。

ここまで、まとめて見ると、田中の第三項理論の考え方では、「真実の百面相」と「多層的意識」をもとに、視点人物から捉えられない対象人物像、言い換えると、「わたし」が見えない他者世界観と「わたし」の世界観のすれ違いは存在するだとわかった。では、文学作品から離れて、仮に、世界をどのように認識するのかを先に述べたい。

マルクス・ガブリエル（2019）は次のように述べて

いる。

「哲学と脳研究は、次の点で考えが一致している。我々が知覚しているのは世界そのものではなく、世界のモデル、すなわち生体の要求に合わせて調整され、高度に処理された、ちっぽけな断片であるという点だ。空間と時間、そして原因と結果さえ、脳によって生み出されている。とはいえ、現実というものは、もちろん存在する。それを直接体験することができないが、周囲から核心に迫ることはできる」（p. 36）

ガブリエルの論から考えると、現実の世界は存在するが、我々人間は目の前に現れる世界しか捉えられない。いわゆる、捉えられるのは世界のモデルである。この世界のモデルは我々人間自身の思惟、考え、世界観に合わせて、脳内で調整されてから、我々の認識になる。しかしながら、世界そのものとは、我々人間の脳内で処理できないから、認識できない。

ここで、筆者が提示したいのは、世界モデルと世界そのものの両方と共に存在する。ということは、我々人間は、ずっと、世界モデルと世界そのものとの間で生きていることであり、そのことは我々まだ、意識していない。つまり、我々人間は縁の世界で生きることがまだ意識していない。筆者の考えでは、世界モデルと世界そのものとの間の世界は縁の世界だと考える。

では、実際の文学作品で考えてみる。

「故郷」は、一人称の語り手、自ら「作者」としての「私」から語る。物語空間内では、視点人物「私」から捉える対象人物「閨土、楊お婆さん」との間のできごとを「作者」としての「私」から語る。これを踏まえた上で、田中（2013）は次のように述べている。

「一人称の〈語り手〉の〈私〉自身が犯す数値の間違いや「昼にして夜」と言う解離した空間が露出する意味、あるいは、〈語り手〉の〈私〉に見えないはずの閨土や楊お婆さんの内面のこと、それに〈語り手〉と〈語り手を超えるもの〉との相関、また「鉄の部屋」のことなど、これからいかに構造化され〈仕掛け〉られているなどを問題化してきた。」（田中 2013 pp. 36-49 日本文学）

「昼にして夜問題」について、田中（2014）は次のように述べる。

「不思議な画面である「紺碧の空に金色の丸い月」を背後に「そのまん中に十一、二歳の少年が、銀の首輪をつるし、鉄の刺叉を手にして立っている。そして一匹の「チャー」を目がけて、ヤツとばかり突く。すると「チャー」は、ひらりと身をかわして、彼のまたをくぐって逃げてしまう。」とあります。背景の藍色を深くするとどうなるか、わたくしなら黒に向かうのではなく透明度を深くしてこの世の物とも思えぬ明るさ、そこに現れている「不思議な画面」、藍色の深く透き通る昼にして夜に輝く「金色」の月と解し、あたかもルネ・マグリッドの絵画の世界となり、昼と夜という多次元の「同時存在」に思いを馳せます。」（田中 2014 p.23 国語教育思想研究）

第三項理論で、永遠に捉えられない客体そのもの（X）があるゆえ、認識することが困難になる。語り手の世界観からも捉えることのみならず、同時に、登場人物の世界観から捉えないといけな。したがって、パラレルワールドの環境になる。そうすると、小説に隠された虚偽を捉えることができる。

この「解離した空間」は二つ同時に存在する。一つは目に見える解離した空間、所謂「昼にして夜」「一人称の〈語り手〉の〈私〉自身が犯す数値の間違い」が起きる空間といわゆる現実の空間である。もう一つは異なる世界に生きている人物の心境という異なる空間である。

この二つの異なる空間世界を意識することで、読者は、「私」が見えない「閨土、楊おばさん」の内面が見えてくる。ここで、筆者が先に提示したいのは、「昼にして夜」にしても、「一人称の〈語り手〉の〈私〉自身が犯す数値の間違い」にしても、確かに異なる世界が現れてくるが、そもそも、「私」と「閨土」が生きている世界も違うである。異なる世界に生きている人物であって、世界観も違う。そのことが二つの「解離した空間」で示されるのである。

4 縁意識と他者世界観

縁意識はあくまでも、世界観の異種であり、見えないが、確実に存在する。気づくのも困難である。縁意識は存在するのに、気づくのが困難である。通

常の人間は、現実の世界に生きていることは常識である。では、虚妄の世界は現実の世界の反射なのか？ 筆者はそう思わない。筆者の考えでは、人間は現実の世界に生きることしか考えたいことは常識だと考え、向こうの世界と言われると、目に見えないため、想像しかできない。

例えば、神話の中で、神の世界、それはあくまでも、人間想像の世界である。物理学だというと、世界は、原子、粒子で作られたから、世界中の物質に自分なりの元素がある。しかし、物理的には、世界の向こう、人間が住んでいる地球の外で、まだほかの世界が存在する。例えば、ブラックホールは確実に存在するが、しかし、具体的に何かであるがはまだ科学者は研究し続けている。そういうふうに考えると、大気圏はまるで、縁のような存在だと筆者は考える。

精神的な縁というものは、筆者の自身経験から考えると、死亡という感覚を味わったから、そもそも現実の世界に存在しないものを経験した上で、向こうの世界、つまり、死亡の世界を認識した。ということは、人間はあくまでも、精神的な生き物として生きている。しかし、現実の世界の向こうは死亡の世界だと、筆者は認めない。筆者の考えでは、現実の世界では、向こうの世界は、我々は永遠に捉えられないため、田中理論で言うと、客体そのものの世界である。人間の精神で言うと、自分の意識にまだ意識していないが、存在する。日常で言うと、無意識のことである。まとめると、意識のある世界と無意識の世界が存在する。つまり、世界モデルと世界そのものが存在するわけである。

したがって、現実の世界の向こうは死亡の世界ではなくて、虚妄な世界ではなくて、了解不能な他者世界、難波（2018）で引用された「意味の場」で説明すると、与える方客体（世界）、我々は与えられる方（世界観）である。我々人間は、客体（世界）を見ることによって、客体（世界）からのイメージを受け取るという行動を行うところは、「意味の場」である。我々は、客体（世界）を認識するためには、客体（世界）から与えるイメージを通して、頭で情報を収集して「本文」になる。人間の世界観はそれぞれ、それなりの「本文」もそれぞれ、客体（世界）は、自身のイメージを人間に伝えるには、媒介（原文の影）が必要である。つまり、**了解不能な他者世界は原文の影としての世界**。したがって、**x はなんらかの形**

で〈存在〉していると言うのは、「原文の影」のことを指し、いわゆる、了解不能な他者世界、現実の世界の向こうの世界と考える。

では、客体そのものの世界はどういう世界なのか、現実の世界の向こう側の了解不能な他者世界はどういう世界なのか、縁意識世界観と了解不能な他者世界はどう関係するのか、縁意識世界観と客体そのものはどう関係するのか、縁意識世界観と無意識はどう関係するのかを論じたい。

客体そのものについて、田中は次のように述べる。

「客体そのものとは、いわば〈言語以前〉の無限の宇宙の物質の散乱、永遠に捉えられない了解不能の《他者》です」（田中 2014 P4）

田中の考えから見ると、現実世界の向こうの客体そのものの世界は言語以前の世界、永遠に捉えられない他者世界である、その他者世界について、田中はまだ、論じていないが、筆者の考えでは、客体と客体そのものの用語を世界という用語で説明すると、世界と世界そのものが両方存在するため、現実の世界が見えにくくなる、人間が目に見える世界は世界そのものだと思込む。

客体と客体そのものの関係について、田中は次のように述べる。

「客体そのものが無いのならば、我々の捉える客体も無いことになるのですから、客体そのものは了解不能で永遠に捉えられなくとも何らかの意味で存在しています。すなわち、我々の捉えている客体は客体そのものの言わば、〈影〉としてあり、これをあたかも客体そのものかのようにして世界を捉えているのです。（田中 2016 pp. 33-34 II 紀要）

田中の考えから見ると、世界そのものがないと、我々が捉える現実世界もない、世界そのものは永遠に捉えられないが、捉えられるのは世界そのものの影を通して、世界を認識できる。そう考えると、物事については、絶対に二つ存在する。物事と物事そのものである。我々人間は頭の中で処理できるのは、主体としての頭と客体としての物事である。しかし、物事そのものに対しては、人間にとってはもう認識できない。認識できないことは〈了解不能な他者〉

ということである。

人間にとっては、人間と人間そのものが存在するわけである。人間は、表と裏があるから、我々ただ認識できるのは表の部分、あるいは、医学の診断で検察できることを含めて、全部表の部分である。しかし、それだけ、人間というものを指すとは限らない。人間そのものは精神のことを指すと筆者は考える。目で捉えられないが、確実に存在する。つまり、日常的に、我々は他人を見る時、他人からのイメージは、その人ではなく、その人の精神から伝わった〈影〉を通して、その人を認識することができる。ということは第三項の世界観である。

その世界観で、作品研究に入ると、

「例えば、漱石の『坊っちゃん』が眼の前にあるとし、これは読み手にとって、「還元不可能な複数性」として現れますから、客体の言語の実体は存在しません。しかし、もともと『坊っちゃん』というオリジナルな言語作品がなければ「還元不可能な複数性」という一回性の現象も起こりません。つまり「読むことの背理」を解く第二の鍵は、読み手に現象している文脈（これをわたくしは〈本文^{ほんもん}〉と呼んでいます）と時間差を持ったオリジナルな原文章（これをわたくしは〈原文^{げんぶん}〉という第三項と呼んでいます）

とが二重構造になって読み手に現象する行為を認識することです。「読むこと」は、〈本文〉と〈原文〉、それに読み手、この三極によって生成していたのです（田中 2008 pp. 6-16 国文学）

つまり、田中の考え方から見ると、第三項理論の世界観の作品研究は、まず、元の〈作品原文〉がなければ、読者が捉える〈作品〉もない。また、読み手に現象している文章、つまり、頭の中でイメージされた文章があると同時に、オリジナルな原文章は原文として指摘される。しかし、〈原文〉はそのまま直接に捉えることができないが、「原文の影」を通して、捉えることができる。しかし、「原文の影」は何らかの形で存在するのかは、第三項理論の難問となる。

5 原文の影とパースペクティブ

難波（2018）は第三項理論の重荷を述べた。難波は、第三項理論は多くの領域の理論を担ってしまったと言うことである。難波は、第三項理論をより良い理解しやすくするためには、マルクス・ガブリエルの「世界はなぜ存在しないのか」の中に提示された「新しい実在論」を基にするべきだと述べている。そして、難波は「意識の場」、「同じ権利」という用語を用い、第三項理論を説明する。

これについては「複数のパースペクティブがあってこそ、見えている客体そのものが異なる」と筆者は考えている。新しい実在論のパースペクティブ論については、難波（2018）はマルクス・ガブリエル（2018）を借りて次のように述べている。

「「新しい実在論」の想定によれば、このシナリオには、少なくとも以下の四つの対象が存在する

マルクス・ガブリエル（2018）は、パースペクティブについて次のように述べる

- 「1 ヴェズーヴィオ山
- 2 ソレントから見られているヴェズーヴィオ山（アストリートさんの視点（パースペクティブ））
- 3 ナポリから見られているヴェズーヴィオ山（あなたの視点）
- 4 ナポリから見られているヴェズーヴィオ山（わたしの視点）

ヴェズーヴィオ山が現在のところイタリアに属する地表面の特定の地点に位置しているか火山であるということ、これだけの事実なのではありません。ヴェズーヴィオ山がソレントからこんなふうに見えるが、ノポリからは全く別様に見えるということ、これも全くの同じ権利で一つの事実です。ヴェズーヴィオ山を見る際、わたしが感じていながら表に出さない様々な感覚も、すべて事実です。こうして新しい実在論が想定するのは、わたし達の思考対象となる様々な事実が現実存在するのはもちろん、それと同じ権利で、それらの事実についての私たちの思考も現実存在している、ということなのです。（p. 145）」

また、難波（2018）は、次のように述べている

「（中略）ヴェズーヴィオ山を富士山に変えたら、富士山が存在し、山梨県にいる太郎さんにとっての富士山、静岡県にいるわたしにとっての富士山、静岡県にいるあなたにとっての富士山も存在する。（中略）意味と意義を一即ち意味の場と、その中に対象事実とを一区別することができません。これでは、様々な「与えられ方」（私たち個々の視点）を通してしか接近できないにしても、「与えられ方」としての意味も、それとして存在しているからである。つまり、意味も一つの対象だということです。（中略）現実存在するということと想像で存在するということと物語の中に存在するということは、「同じ権利」であるということである。」

以上のことについて「同じ権利」、「意味の場」に注目したい。筆者の考えでは、「同じ権利」というのは、物理的に存在するもの、現実の世界に存在するもの、目に見えるもの、そして、我々人間は、この物理的なものを見ることによって、頭の中で浮き上がるこの物理的なものに関するイメージも実在する、目に見えないけれども、物理的なものと共に実在するということは同じ権利である。

「意味の場」というのは、認識の層面を指すのこと、ここでは、与える方客体、我々は与えられる方である。我々人間は、客体のものを見ることによって、客体からのイメージを受け取るという行動を行うところは、「意味の場」である。我々は、客体を認識するためには、客体から与えるイメージを通して、頭で情報を収集して「本文」になる。人間それぞれ、それなりの「本文」もそれぞれ、客体は、自身のイメージを人間に伝えるには、媒介が必要である。それは、視点、いわゆる、パースペクティブである。与えられたパースペクティブを通して、我々人間は客体を認識できるようになる。しかし、大事なことは、パースペクティブはただ一つだけではなく、複数のパースペクティブがあると私は考えている。一つのパースペクティブと複数のパースペクティブの違いも似非ポストモダンとポスト・ポストモダンの違いである。

文学の場合はまずモダンの考え方は：主体と客体二個対立の考えである。つまり客体そのものがない。ポストモダン：客体そのものがない、主体によって捉えられる客体だけある。主体が消えれば、客体も

消える。似非ポストモダン：客体そのものも存在するにもかかわらず、了解もでき、到達できる。ここでバルトが言う容認可能の複数性のことである。ポスト・ポストモダン（新しい實在論）：複数のパースペクティブがあってこそ、見えている客体そのものが異なる。つまり、客体そのものは認識できない、了解不可能の存在である。認識するのは客体そのものの影である。言い換えると、私たちの中の他者は存在するけど、永遠に到達できない。バルト二期が言う還元不可能な複数性のことである。

パースペクティブの力というのは第三項理論を認識できるように必要とされる力だと筆者が考えている。しかし、「原文の影」はただ作者の思いによって書かれた客体の文章ではないと筆者は提示したが、それは何故かというところ、「原文の影」は媒体として存在するから、我々読者と客体の文章の間で互いに繋げている媒体である。

渡辺（2018）では、難波（2015）が提示した関数群 F としての世界観を用い、文学研究者である田中実氏の第三項理論の読みを実体化された。

渡辺は第三項理論の世界観の読みを次のように捉える。

「田中のいう言語を F 、客体を y 、客体そのものを x とすると、田中の世界観認識は、

言語（客体そのもの）＝客体
と表現することができる。言語を扱うのは、客体を認識する主体である。そのため難波（2015）では、以下のように表現されている。

主体（客体そのもの）＝客体 $\Leftrightarrow (F(x)=y)$

田中が「第三項」理論において前提とするのは、この「主体（客体そのもの）＝客体 $\Leftrightarrow (F(x)=y)$ 」という世界観認識である。

（中略）

田中は、読みという行為を、「本文」、「原文」、読者という三項関係によって捉えようとする。これを世界観認識 $F(x)=y$ によって表現すると、

$\overset{F}{\text{読者}}(\overset{x}{\text{原文}}) = \overset{y}{\text{本文}} \Leftrightarrow (\overset{F}{\text{読者}}(\overset{x}{\text{文学作品そのもの}}) = \overset{y}{\text{文学作品}})$

と表すことができる。読書行為においては、

$\overset{F}{\text{読者}}(\overset{x}{\text{文学作品そのもの}}) = \overset{y}{\text{読み}}$

というような表現になる。」（渡辺 2018 pp. 15-16）

渡辺の研究によると、第三項理論の読みは結果的に「本文」としての $y \neq \text{原文}$ （作品そのもの）としての x ということになる。いわゆる、田中が言う「還元不可能な複数性」のである。

しかし、渡辺が第三項の読みが実現できないという難問を指摘した。

「しかし、ここで次のような疑問が生じる。田中のいう「第三項」の読みが、読者（= F ）—読み（= y ）—文学作品そのもの（= x ）という三項関係を前提としているとしても、読書行為において、読者には、自身の読み= y しか現象しないのであるから、文学作品そのもの= x を指定するとしても、それは原理的なものにとどまり、実現不可能な読書行為を指すことになるのではないのかという疑問である。」（渡辺 2018 p. 16）

渡辺の研究によると、第三項理論の読みは結果的に「本文」としての $y \neq \text{原文}$ （作品そのもの）としての x ということになる。いわゆる、田中が言う「還元不可能な複数性」のである。つまり、ここで作品そのものとしての原文と作品そのものとしての影が存在するわけである。

難問について、筆者から考えると、まず、第三項論は主体のわたし、客体の作品と客体の作品そのものという三項になる。読者—文学作品（ x ）—読みという三項関係を前提で、それとも読者—文学作品の影（ x' ）—読みという三項関係を前提で第三項理論の読みを捉えるのかという難問である。つまり、文学作品（ x ）と文学作品そのもの（ x' ）、言い換えると、文学作品（ x ）というのは、〈原文〉のことを指す。文学作品の影（ x' ）というのは、〈原文そのもの〉を指すと考える。

すなわち、〈原文〉と〈原文そのもの（影）〉、が存在するから、第三項理論の読みが難しくなると考える。

しかし、筆者の考えでは、元の〈作品原文〉ということとは精神のこと、つまり、現実の作家の精神の

ことを指すと考える。作家の精神は我々読者が捉えられないが、しかし、書かれた作品という〈原文〉を通して、読者が「原文の影」で生成された読み〈本文〉が捉えることができる。「原文の影」とは、いわゆる、作家の書く行為である。

原文 (x) と原文そのもの (x') について、筆者は、渡辺 (2018) ¹ の研究に基づいて、改めて、難波 (2018) ² の考え方を説明すると、

原^文富士山

太郎 (富士山) = 富士山の読み

わたし (富士山) = 富士山の読み

あなた (富士山) = 富士山の読み

それぞれの世界観 F、H、G によって、異なる本文 y、a、z を生まれる。しかし、富士山は富士山そのものとして存在する。

与える方客体 (富士山)、我々は与えられる方

(主体の世界観) である。我々人間は、客体 (富士山)

を見ることによって、客体 (富士山) からのイメージを受け取るという行動を行うところは、「意味の場」である。我々は、客体 (富士山) を認識するためには、客体 (富士山) から与えるイメージを通して、頭で情報を収集して「本文 y、a、z」になる。人間の世界観はそれぞれ、それなりの「本文」もそれぞれ、客体 (富士山) は、自身のイメージを人間に伝えるには、媒介「原文の影」が必要である。

また、渡辺が提示した「第三項」の読みでは、

正解到達主義のように x を実体、すなわち F という関数と関わりをもたずにアприオリに存在するものとは考えないので、原理的には、 $y \neq x$ となるといえる。」 (渡辺 2018 p. 16)

したがって、難波 (2018) と渡辺 (2018) を踏まえて考えると、「原文の影」は第三項領域で客体そのものだと考え、我々主体の目から捉えられないが、実は、〈原文〉としての富士山と「原文の影」としての富士山は両方とともに存在すると筆者は考える。

そうであると、

太郎 (富士山) = 富士山の読み (富士山その

もの) ⇔ 太郎 (富士山) = 富士山の読み

わたし (富士山) = 富士山の読み (富士山そ

のもの) ⇔ わたし (富士山) = 富士山の読み

あなた (富士山) = 富士山の読み (富士山そ

のもの) ⇔ あなた (富士山) = 富士山の読み

という読みになっている。

ということは、渡辺が言う「読み=y が文学作品そのもの=x に還元できないにしても、x はなんらかの形で〈存在〉しているので、x の存在を無視することはできない。」つまり、読みは、原理的に、 $F \neq y$ となる。」 (渡辺 2018 p. 16)

x はなんらかの形で〈存在〉していると言うのは、(x') として「原文の影」のことを指すと考える。

まとめて見ると、〈原文〉は精神(書かれた作品)のことを指す、「原文の影」は簡単に言うと、作家の精神(作家の書く行為)のことを指すと考える。ここで、まだ問題がある、それは、作品の中で、作品は別の世界として、その世界で現れた人物、でき事は主体、客体と客体そのものも存在する。つまり、第三項の中にまた、第三項が存在する。したがって、

¹ 渡辺 啓仁 (2018) 「第三項理論を運用した国語科文学教育の提案—複数の自己を生きるために—」 広島大学大学院教育研究科修士論文 (平成 30 年) 未刊行

² 難波 博孝 (2018) 「新しい実在論」と第三項理論 (特集 第三項がひらく文学教育 : ホスト・ポストモダンの〈世界観認識〉『日本文学』67(8) pp.18-29

前で筆者の考えで、xはなんらかの形で〈存在〉していると言うのは、「原文の影」のことを指し、いわゆる、了解不能な他者世界、現実の世界の向こうの世界と提示した。

つまり、なぜ、第三項理論では「原文の影」と、〈原文〉についての説明がしにくいかというと、それは、文学研究者は、作品から作者への研究をする。ということを説明すると、まず、注目された最初から、作品から分析始まった。作品の中で、語り手の場、語り手の世界があるため、登場人物の世界を語ることができるようになる。語り手の世界を語る機能としての語り手の第三項世界があるゆえ、対象そのものが認識できるようになるという順番になる。また、そこから、作家への分析は少ない。しかし、〈原文〉は作家の精神によって書かれた作品として現れる。「原文の影」は作家の書く行為である。つまり、「原文の影」から作家への書く行為を探求することができる。

筆者の考えをまとめて見ると、第三項理論では、主に客体そのもの、いわゆる「原文の影」をめぐって研究する。しかし、「原文の影」は作家の書く行為として現れ、つまり、永遠に捉えられないけれども、確実に存在する。今の文学研究は作品から作者への研究をするという形となる。つまり、作品（テクスト）を中心に分析するということである。では、「原文の影」を研究するために、注目されるのは作家の精神だとすると、分析の結果は変わるかもしれない。

つまり、作家の書く行為を分析しながら、作品研究を行う。なぜ、第三項理論の中にまた、第三項理論が存在するということは、第三項理論で、客体そのものに立つと、また、二項になってしまう。登場人物自体を語っている人はそう言う世界にいるわけではなくけれども、なぜ語っているのか意味が不明となる。

つまり、筆者が考えたいのは、ただの客体そのものを認識するだけでは、逆に第三項理論の真髄を失うと考え、現実の作家が書かれた (x) 〈原文〉と現実の作家の書く行為 (x') 「原文の影」の間でズレが存在するわけである。

そのズレは、筆者の考えでは、縁意識の世界観と思う。縁意識の特徴は作家から作品への分析を同時に行うである。作家と人物を同時に関わりながら、分析する。

まとめると、第三項理論では、機能としての語り手がいるゆえに、二項の世界観で捉えられない客体そのものが捉える。では、難問は作者を捉えるのかという問題を考える時に、田中の第三項論の考えでは、関係概念の作者という概念がある。関係概念の作家と現実の作家が生きる世界が違い、一つずつの世界に住むということである。しかし、筆者の考えでは、一つずつの考え方は、たとえ、客体そのもの「原文の影」があると認識ができていても、また、二項の世界観になってしまう。そうすると、パラレルワールドの視覚が生まれてくる。いわゆる、平行的な世界観、現実の作家が生きる世界と虚偽の関係概念の作家が生きる世界を並行的に進んでいる。しかし、いかに、並行的な世界観にしても、確かに、同時に進んでいるのは可能である。問題は、同時に進んでいながら、互いに現実と虚偽を認識することが大事である。互いに現実と虚偽を認識するとともに、ある境界が出てくる。本論で言うと、縁世界観と言う概念である。

6 第三項理論から縁意識へ―「故郷」で考える―

鄭（2000）は、魯迅の縁意識と小説の語り手の問題に注目している。鄭の考えをまとめて見ると、鄭は次のように論じている。

「作家の縁意識によって、作家の世界と相対する外位性を得られる（中略）作家の縁意識によって、作家の世界と相対する外位性を得られる。空間的、時間的、価値的及び意味的である。これで、外位性に頼って、作者が語り手の視点を通して、主人公の外形、形象、背景を描かれる。それにも関わらず、作者が自覚的に主人公の生きる世界から排除しながら、自由に主人公の合理的な生活のプロットを作る。一方、この外位性は、もっと高いレベルから見ると、作者が「語り手」の外で、二重視野を作ってしまう。語り手自身を作者が観察する対象になってしまう。作者との対話ができ、付き合い」（pp. 39-40）

縁意識のポイントは、無意識の世界を認識したら、二つの世界観認識を同時に考えることができ、同時に、違う場面を読み取ることができるということである。また、現実の世界であり得ない、奇妙な考え方を、無意識の世界から考えると、逆に筋が合う。

そう考えると、現実の世界で、求められないことを向こうの世界から求められる。したがって、縁意識の世界観で、私の中の他者を追い詰めれば、追い詰めるほど、「他者」そのものが現れると考える。

田中は「昼にして問題」、金色の月は「二重空間」を説明している。そして、田中は数値の間違いを「多層的意識」の「仕組み」を用いて明している。しかし、パラレルワールドと「多層的意識仕組み」の関係はどのように説明すればよいのかということも田中はまだ提示していない。筆者は本論で、パラレルワールドと「多層的意識仕組み」の関係を自分の「縁意識」の世界観を用い説明するつもりである。

田中は消えた三十年の問題を「＜聞き手＞に語る＜語り手＞に分かっていない＜仕組み＞」と言うように説明した。問題なのは、「＜聞き手＞に語る＜語り手＞に分かっていない＜仕組み＞」はどのような仕組みがあるのか、なぜ、魯迅がこのような仕組みを使っているのかをまだ提示していない。

田中の第三項理論の考え方から見ると、田中は「昼にして夜」の問題をもう一つの世界が存在すると考えている。その世界が了解不能な世界としての存在である。

昼なのに、月が出られるという「不思議な画面」を魯迅が描いたのである。「故郷」の中で魯迅が縁イメージを持って使われるモチーフまだある。例えば「海辺の砂地」、「歩く道」、「希望」という縁イメージが使われる。

縁意識のポイントは、無意識の世界を認識したから、二つの世界観認識が同時に考えることができ、同時に、違う場面を読み取ることができる。また、現実の世界であり得ない、奇妙な考え方を、無意識の世界から考えると、逆に筋が合う。そう考えると、現実の世界で、求められないことを向こうの世界から求められる。なぜかと言うと、現実の世の普遍的の考え方は、人々が普遍の基準、普遍の思惟にしたがって同じく考える。筆者の考えでは、それが自分の無意識のことを気づかない。

しかし、縁意識では、人間の思惟はただ、現実の世界のみならず、無意識の世界も同時に考える。したがって、縁意識の人間は周りから理解されない状態は逆に普遍である。その結果、縁意識の考えでは、身体は現実の世界に生きるという現実無力感が強く、目に見える世界は逆に生きる世界ではなく、無意識の世界こそが生きる道である。

「わたしの覚えている故郷は、まるでこんなふうではなかった。わたしの故郷は、もっとずっとよかった。その美しさを思い浮かべ、その長所を言葉に表そうとすると、しかし、その影はかき消され、言葉は失われてしまう。やはりこんなふうだったかもしれないという気がしてくる。そこでわたしは、こう自分に言い聞かせた。もともと故郷はこんなふうなのだ——進歩もないかわりに、わたしが感じるような寂寥もありはしない。そう感じるの、自分の心境が変わっただけだ。なぜなら、今度の帰郷は決して楽しいものではないのだから。」pp. 260-261 (中学校国語3 学校図書)

語り手が見える現実の世界は暗いである。この暗い世界、ただ、空の色ではなく、人間が生きる世界ではないと考える。その中で、登場した＜わたし＞が頭の中思う故郷と目に入る故郷が違うわけである。何十年ぶりに、故郷に帰ってくるのか全く幸せを感じられない。逆に、色んな人と会いに行ったり、家を売ったりする雑事ばかり考える。そう考えると、＜語り手＞にとっては、そもそも、故郷というものがなかった、ただ、人間が生まれて育てきたところを故郷だと名付けるという頭の中の精神のイメージである。つまり、今の＜語り手＞が目に見える場所は何でもない世界である。何でもない世界で、なぜ昼なのに、月が現れるかということ、普通の世界で、月は現れるのは夜である。それにも関わらず、夜の時間が遅くなると、月の色も変わっていく。＜語り手＞が見える月が金色の月ということは、深夜の頃である。しかし、昼に現れてきた。そもそも存在しないものが現実の世界で現れる。昼なのに、月が現れるという不思議な画面は＜語り手＞が自分の無意識な世界が認識した上で、現実の世界と無意識の世界を同時に認識した上で、捉えられる不思議な画面である。

「まどろみかけたわたしの目に、海辺の広い緑の砂地が浮かんでくる。その上の紺碧の空には、金色の丸い月がかかっている。思うに希望とは、もともとあるものとも言えぬし、ないものとも言えない。それは地上の道のようなものである。もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。」p. 280 (中学校国語3 学校図書)

人間はいつも「故郷」＝「希望」と思っている。いくらどこに行っても、最終的に、自分の故郷に戻りたいという気持ちがあるはずである。それが、ただ精神的に、脳内の反応である。そう考えると、もし、故郷そのものがなかったら、希望というものもないである。つまり、〈語り手〉が最初から、いわゆる、冒頭から希望というものがない。ということは、現実の世界には、希望がないが、しかし、現実の世界に生きるために、自分自身の救い方法を探さなければならない。自分の無意識の世界で自分自身の救い道を探さなければならない。したがって、〈語り手〉が物語りを語ると同時に、二つの世界が存在する。自分自身の無意識の世界を混ざって現実の世界を語る。したがって、昼なのに、月が現れるという不思議な画面が現れるのである。

7 まとめ

哲学の存在論から捉える文学の基礎理論の思想は、従来の作品研究、テキストの研究から現実作家の精神も含めて分析する。また、作家の書く行為を分析しながら、作品研究を行う。筆者は第三項理論の中にまた、第三項理論が存在すると考えたが、改めて説明すると、近代文学作品の中に、田中（2008）が言う「語り手＋自己表出」³と言う語り手の無意識的な世界が存在するということである。その無意識的世界は小説の第三項世界と指摘することができる。

また、小説作品としての〈原文〉と作家の書く行為（精神）として「**原文の影**」と言う**精神のことも第三項と考える**。すなわち、第三項理論は、虚偽である作品世界を分析する理論にとどまらず、現実の作家も同時に分析する。この分析によれば、近代小説の「語り手＋自己表出」と言う**語り手の無意識な第三項世界が存在するとともに、現実の作家にも、生きる無意識の世界も存在する**。筆者は、その無意識の世界は「原文の影」の世界と考える。大事なものは、現実の作家は、虚偽の作品世界と作家自分自身が生きる世界の間**一縁一**に存在するということである。

存在論の言い方で見ると、現実の作家の無意識の「原文の影」の世界は世界そのもの、書かれる小説

作品としての〈原文〉の世界は世界モデルのである。つまり、現実の作家自分自身も、世界モデルと世界そのものとの間の縁の世界で存在する。

また、客体そのものとしての第三項を注目しすぎると、二項の世界観になってしまう。そうすることは、第三項理論という原理に逆らうこととなる。第三項理論は、主体と客体の二項世界観を乗り越え、客体そのものという第三項の世界を提示した。しかしながら、客体そのものという第三項の世界を注目すぎると、人間の脳は無意識のうちに、二項の世界観、つまり、**客体そのものの世界と主体と客体が存在する世界という二項の世界観になってしまう**。すなわち、縁にたつて研究する文学理論研究が求められると考える。

まとめると、縁意識の世界観で無意識の世界を認識したら、二つの世界観認識を同時に考えることができる。特に、二項の世界観、或いは第三項の世界観を研究するのみならず、同時に捉えることを求められている。我々読者は虚偽と真実の間という縁の世界で認識することが大事である。認識というより、まさに、その縁という境界で生きている。

そういうような縁の世界観で、我々人間は一体何を見えるのか、自分自身の無意識な世界はどこに隠されるのかという生きる力として期待される。

つまり、第三項理論と縁世界観はただの文学理論ではなく、世界観を転覆する思想だと考えることもでき、文学教育現場でも、文学の授業で大きな意味をもたらせる。人間はそれぞれ、自分なりの縁意識を持っていると考え、ただし、気づくかどうかの問題である。

国語教師は、作品と生徒の間に立つ、生徒として、作品と先生の間に立つ、作家は、作品と読者の間に立つ、人間は自分の演じる役によって、自分の縁意識も変わっていくと筆者は考える。その中で、変わらないものなのは、人間は生まれてから、既に、生と死の間に立つということなのである。

参考引用文献

（日本語文献）

田中実（2008）b「『読みの背理』を解く三つの鍵—テキスト、〈原文〉の影・〈自己倒壊〉そして《語り手の自己表出》—」『国文学 解釈と鑑賞第73巻第

³ 田中実（2008）b「『読みの背理』を解く三つの鍵—テキスト、〈原文〉の影・〈自己倒壊〉そして《語り手の自己表出》—」

7号』至文堂 pp. 6-16

田中実 (2014) 「続〈主体〉の構築：魯迅の『故郷』
再々論 『国語教育思想研究』」(8) pp. 19-30,

田中実 (2013) 「奇跡の名作、魯迅『故郷』の力：
大森哲学との出会い、多層的意識構造のなかの〈語
り手〉」『日本文学』 62(2) pp. 36-49

田中実 (2014) 「世界像の転換、〈近代小説〉を読む
ために(続々)〈主体〉の構築(特集 〈第三項〉と〈語
り〉)：ポスト・ポストモダンと文学教育の課題
(3)」『日本文学』 63(8) pp. 2-14

田中実 (2018) 「〈近代小説〉の神髄は不条理、概念
としての〈第三項〉がこれを拓く：鷗外初期三部作
を例にして」『日本文学』 67(8) pp. 2-17

外山滋比古「近代読者論」(1974) みすず書房

難波博孝 (2015) 「合言葉はF」『日本文学第 64 巻
第 8 号』日本文学協会 pp. 16-31

難波博孝 (2016) 「第三項理論による教育・授業—合
言葉はF 続き—」『日本文学』 第 65

巻第 8 号』日本文学協会 pp. 15-27

難波博孝 (2018) 「新しい実在論」と第三項理論(特
集 第三項がひらく文学教育：ポスト・ポストモダ
ンの〈世界観認識〉『日本文学』 67(8) pp. 18-29

渡辺皆仁 (2018) 「第三項理論を運用した国語科文
学教育の提案—複数の自己を生きるために—」広島
大学大学院教育研究科修士論文(平成 30 年)未刊行
マルクス・ガブリエル (2018) 『なぜ世界は存在しな
いのか』講談社

マルクス・ガブリエル (2019) 『わたしは脳ではな
い』講談社

『中学国語 3』 学校図書 平成二十三年二月二十
八日 検定済み

(外国語文献)

鄭家建 (2000) 「魯迅：縁の世界」『魯迅研究月刊』
第 11 期 pp. 30-42